

### ③ 玩具

#### 加工円盤

加工円盤（第 208 図）は、当該調査区から出土したすべてを表にした。土師器皿、陶器すり鉢、陶器甕、陶器碗、磁器碗、軒丸瓦、平瓦、石材など材料は様々である。742 は SX4096 から出土した。土師器を加工して 2.4cm × 2.2cm、厚さ 0.8cm を測る。他の円盤と比べ小さい。743 は SX3018 から出土した。磁器碗を加工して高台部分のみを遺している。直径約 4.8cm、厚み 1.4cm を測る。打ち欠いて作成しているが、割れ口の断面は摩耗しており、使用痕跡が認められる。744 は第 2 遺構面出土である。陶器すり鉢を加工して 3.5 × 2.8cm、厚さ 1.0cm を測る。744 は他の加工円盤と比べて小さい。

747 は三巴文の軒丸瓦を加工して円盤にしている。直径 5.0cm、厚さ 1.1cm を測る。751 の平瓦を加工したものは多いが、軒丸瓦を加工したものは少ない。748 は SX3028 から出土した結晶片岩を加工している。750 は SX1003 から出土した。平瓦を加工して円盤としている。

概観すると、材質は様々であるが、大きさは平均して直径約 5cm に加工しているものが多い。円盤状に加工した割れ口、欠け口は磁器碗にも摩耗しているものがあり、使用痕跡が認められる。年代は第 4 遺構面から第 1 遺構面まですべての遺構面の遺構で出土しており、江戸時代を通して使用されていたことが窺える。その用途はおはじきなど玩具として想定できるが、城下町跡の調査からは相当数の加工円盤が出土しており、投石など多数を必要とする使用方法を想定する。

#### 芥子面・人形（第 209・210 図）

753 ~ 755 は芥子面である。753 は猿面である。透明釉を施す。内面は横に粘土板を貼り、その中央部を穿孔する。754 は狐面である。狐の額から鼻筋にかけて緑釉を施す。両目両耳を穿孔する。755 は鼠面である。横からみた様子で鼠とわかるよう尻尾を長くつくる。内面を粗く押さえて成形する。

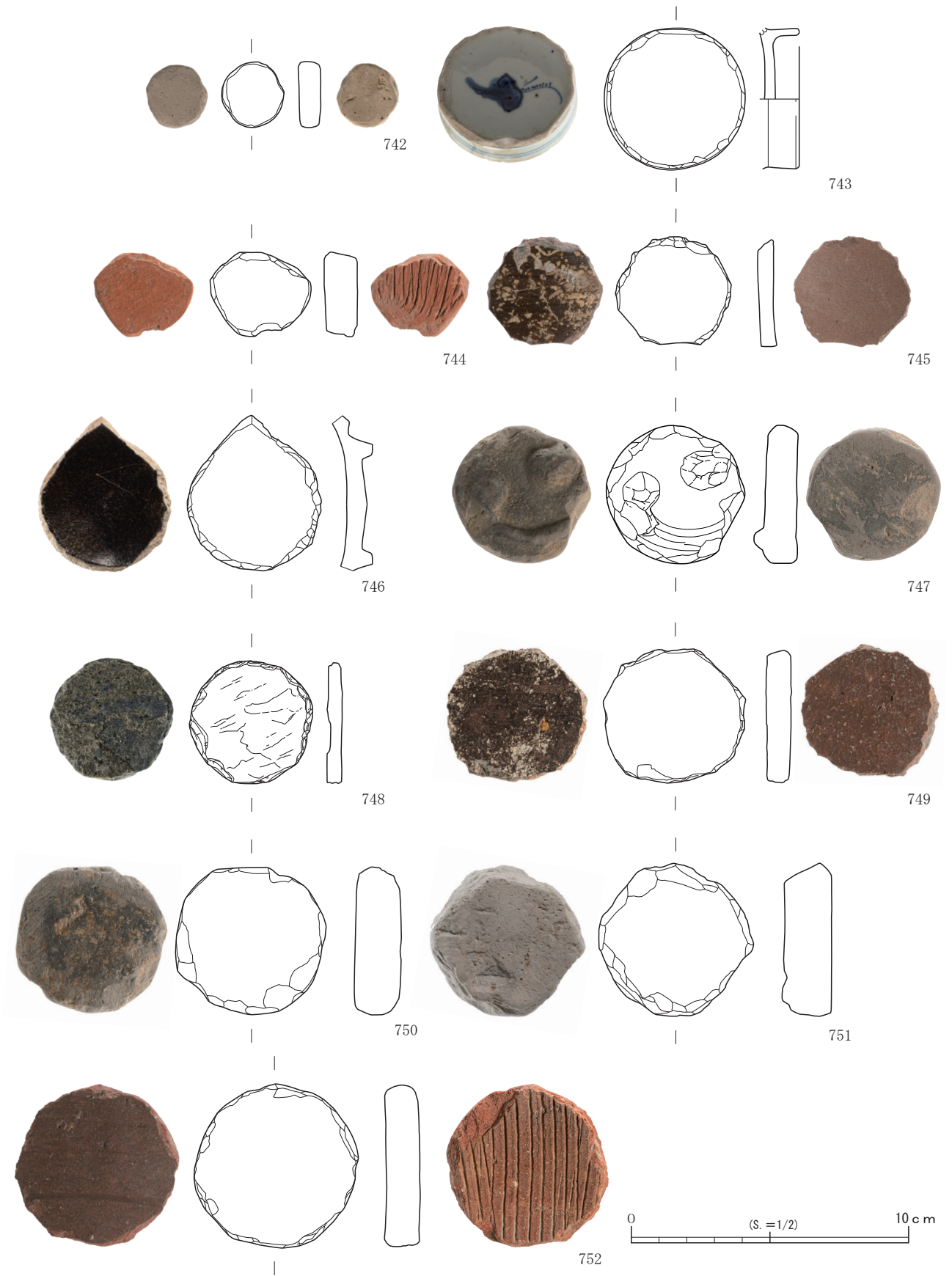
756 ~ 760・766 は人形である。756 は鳩笛である。体部上面中央部と尻尾部分を穿孔し、内部で通じている。型合わせで成形する。757・759 は猿形である。757 は猿が胡坐をかいて座っている様子を手捻りで成形する。腕の部分に緑釉が残存する。759 は二匹一組の猿である。頭以外の成形は簡略化している。右の猿が左の猿の右腕を両手で持つ様子である。猿は庚申信仰や「難がサル」と語呂合わせ、馬の病気を癒す意味といわれる。

758 は頭に鉢巻をした操り人形である。首部には穿孔はカマ穴がある。760 は唐子である。頭部と体部が離れているが同一地点から出土した。型合わせによる成形である。766 は口を開けた狛犬である台座に座り左を向く様子で、緑釉が施される。

#### ままごと道具・箱庭道具（第 210 図）

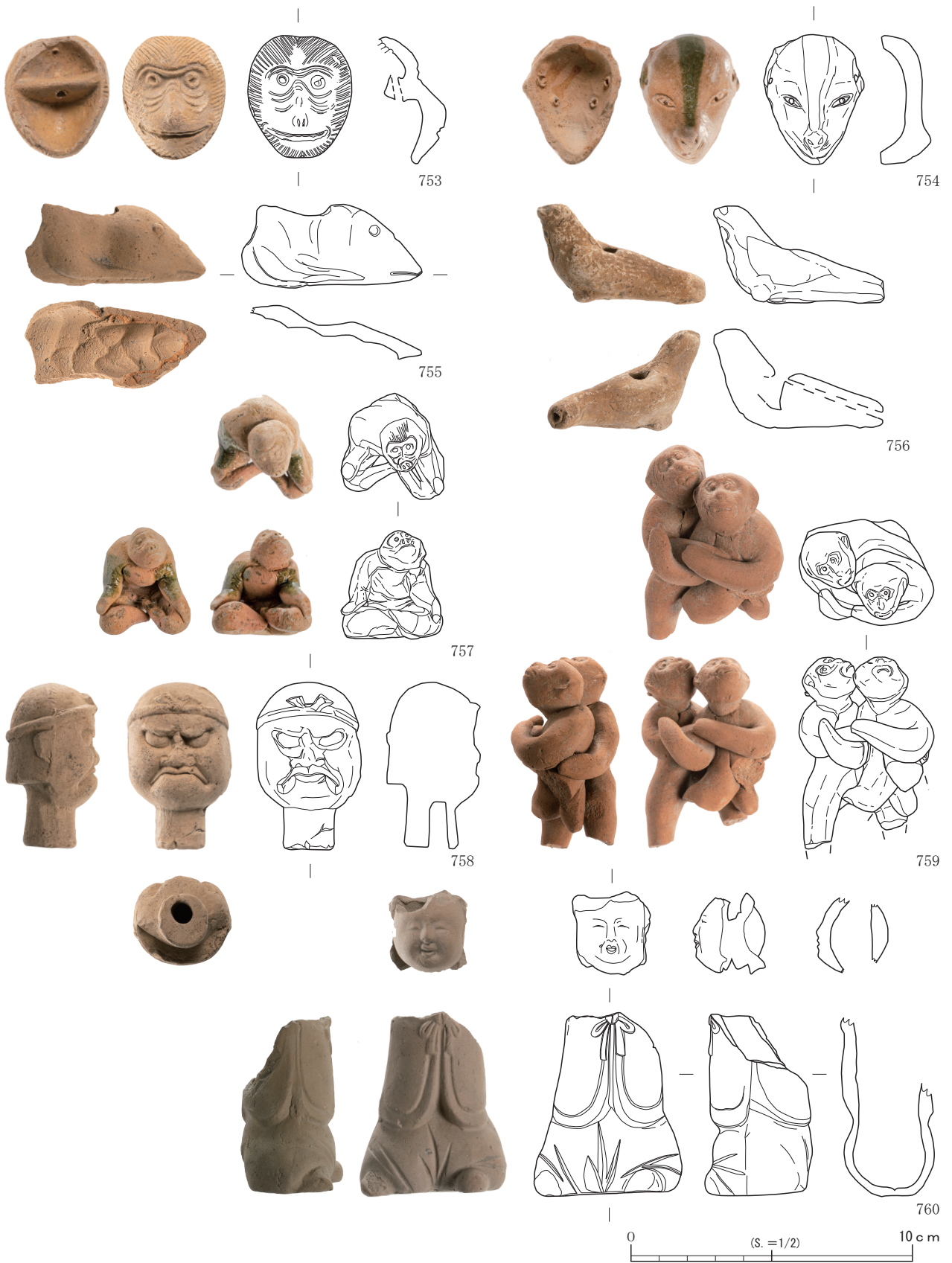
761 ~ 762・764・765・767 はままごと道具である。761 は焜炉である。底部外面に 4 脚と 2 つ穿孔がある。上面部中央にも穿孔があり、先の 2 つと通じている。659 は羽釜である。上部は、2 箇所把手をつけ緑釉を施す。内面は中空である。下部は体部から底部にかけて無釉である。型合わせ成形である 764 は椀、765 は蓋、767 は皿である。

箱庭道具 763 は舟形で緑釉を掛けている。



第 208 図 加工円盤



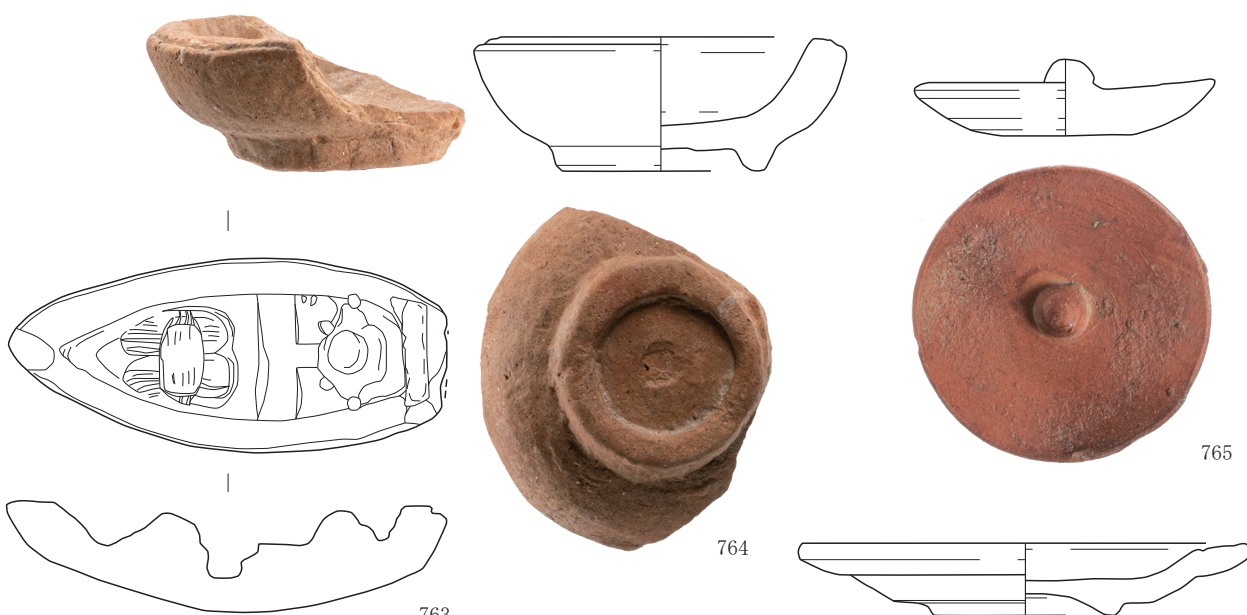


第 209 図 芥子面・土製人形



761

762



763

764

765



766

767

0 (S. = 1/1) 5 cm

第 210 図 ままごと道具・箱庭道具・土製人形

#### ④ 貝類

徳島城下町跡から出土した貝について、当該調査の出土遺構ならびに種類・個数を一覧にまとめて表し、当該調査ならびに既往調査資料を使ってその種類を説明し、概観する。

##### 【巻貝】

##### アワビ

出土したアワビ類の1点は、形状が楕円形状と推測でき、クロアワビと判断できた。そのほかに出土したアワビ類の多くが破片であったため、クロアワビ以外にも表面赤色のメガアワビなどが含まれている可能性がある。クロアワビは水浸が浅い水深5m地点まで、メガアワビはやや深い水深15m地点までに生息する特徴がある。いずれも沿岸の外海岩礁底に生息している。大形池状遺構(SX3009、SX3009第2層、SX3009第3層)から形状を遺す1点と破片多数が出土した。特徴的な形状から出土品は視認されやすいと思われるが、他の城下町跡でも出土点数は少なく高級食材として扱われ、贅沢品であったと考えられる。

##### サザエ

食用の貝として広く認識されており、いずれも尖った結節瘤(イボ状の突起)のない個体が出土している。この突起は波の穏やかな所で育つと作られないとされている。出土品は殻幅8cm前後の個体が多く、それに合った蓋が出土している。サザエの蓋は特徴的な渦巻き円板であるため、見極めが容易である。内湾から沿岸の岩礁底に生息する。

大形池状遺構(SX4029、SX3009、SX3009第2層、SX3009第3層)やSX4015、SX4064、SX2002、SX2009、(SK2008、SX2011出土貝はサザエの可能性高い)、SX2015、SK2010、SK2011、SK2015、第2遺構面、第3包含層、第4包含層で57点、A区SX2027、壁面掘削で4点が出土した。蓋の出土遺構はSX3009第2層、SX2015、第2遺構面、第2包含層であり、そこから10点出土した。

##### カワアイ

細長く塔形状で殻高5cmほどの小さな巻貝である。内湾河口域の干潟に生息する。第1遺構面上層の建物基礎の掘形から1点出土した。他の貝に混じって持ち込まれたと思われる。

##### アカニシ

出土品は殻幅10cm前後と大形のものが出土している。螺塔が低く、体層の占める割合が大きい。大形土坑(SX4029、SX3009、SX3009第2層)から9点、SX2004と攪乱土坑4から各1点、A区SX2027で1点が出土している。各地の内湾の干潟の砂質・泥質などに生息しアサリやカキなどを食べる。殻は硬いため形状は遺存しやすく、視認されやすい。

##### テングニシ

近海の浅い海の砂底に生息している。螺頭は円錐形状で各螺層には強い肩があり、7～9個の尖った結節瘤(イボ状の突起)がある。殻皮が剥がれた状態は白みがかった薄い桃色の表面である。殻は硬いため、原形を保って出土したと思われる。殻幅13cmのものがほぼ完形で大形池状遺構(SX3009第2層)、破片で第4包含層から各1点出土した。

## ツメタガイ

殻幅 4 センチを超え、特徴のあるつやのある丸い貝殻である。特に螺層は丸みを帯びている。干潟や潮間帯（潮の満ち引きで生じる海岸線の間帯部分）から水深 50m くらいの砂地に生息する。アサリに丸い穴をあけて食べるため、アサリに混じって捕獲したものと思われる。大形池状遺構（SX3009 第 3 層）と SX1008 から各 1 点出土した。

## バイガイ

貝殻に厚みがあり、破損しにくい。螺頭は高く、縫合の境界は鮮明で螺層は丸みを帯びている。第 1 包含層から 1 点出土した。丸い縦長の殻長 7cm 前後の巻貝である。各地の浅い泥質に生息している。他の貝に混じって持ち込まれたと思われる。

## 【二枚貝】

### ハイガイ

殻長 5cm で貝殻は厚い。17・18 本の放射肋は太く凹凸を形成し、この放射肋に結節肋（突起状）が顕著に認められる。殻頂は広くて高く、横からみると丸い印象をもつ。縁端は幅の広い鋸状をしている。大形池状遺構（SX4029）から 1 点、C 区遺構面から 2 点出土している。内湾の干潟の泥底に生息する。

### マガキ

表面は黄・紫・褐色の放射帯や斑紋があり、比較的細長い形状となる。周縁は強く波打つ。広く各地に生息している。比較的細長い形をした殻長 10cm の個体出土した。単にカキ（牡蠣）と呼ばれる事が多い。岩など硬いものに好んで付着する性質をもつ。SX4092、SX1008、側溝掘削、第 3 遺構面から 6 点出土した。汽水域や内湾に生息する。

### ヤマトシジミ

殻長 1.5cm までの個体出土した。形状は扇形で殻頂部が最も厚く、ふくらみは少し弱い。光沢は強く、表面に見られる同心円状の輪肋ははっきりしており角が立っている。幼貝時は貝殻の表面に黄色い筋が認められる。汽水域に生息することから、吉野川などの河口域で採取したものと思われる。大形池状遺構（SX3009 第 2 層、SX3009 第 3 層）、SX3010、SK2018、第 1 包含層、機械掘削、側溝掘削から 35 点、C 区第 2 遺構面から 1 点出土した。なかでも SX3010 から 23 点出土している。ヤマトシジミはとて小小さく脆いため、調査掘削時に失われてしまったものが相当数あった。徳島城下町跡では貝類のなかでとても多く出土していることから、当該調査においてもハマグリやチョウセンハマグリの数量以上の相当量出土していたと思われる。

### マシジミ

殻蝶 2.5cm 前後とヤマトシジミよりも大きい印象をもつ。やや殻幅のひろい正三角形で、同心円状の輪肋ははっきりしているが滑らかで角は丸い。ふくらみは弱く、表面は褐色で光沢は鈍い。SX3010 から 25 点出土した。淡水域に生息する。マシジミも小小さく脆いため調査掘削時に失われてしまったものが相当数あった。



## カガミガイ

形状は白い鏡のように丸く平たく、成長線が顕著のため同心円状に見える。殻長 5cm 前後の個体が出土した。内湾の干潟や砂底に生息する。アサリやハマグリと一緒に捕獲したものと思われ、数は少ない。大形池状遺構（SX4029、SX3009 第 2 層）から 6 点、第 1 包含層から 7 点出土した。

## アサリ

殻長 3cm 前後の個体が出土している。貝殻は楕円形状で輪肋と放射肋により布目状の筋がある。模様のあるなしがあり、模様は多様である。大形土坑（SX3009 第 2 層）から 1 点出土した。これまでの徳島城下町跡の調査でも出土数は極めて少ない。内湾の砂質、砂泥質、干潟に生息する。

## オキアサリ

形状はハマグリと似ているが、ハマグリよりも角張って正三角形状をしている。コタマガイと形状はほぼ同じように見え、区別をつけるのは非常に困難である。殻長は 7cm まで大きくなるコタマガイに比べ、4～5cm 前後であること、ややふくらみがあること、より縁辺が直線的な正三角形状であることからオキアサリであると考えられる。模様が多彩でアサリよりも大きい。大形土坑（SX4029、SX3009 第 2 層、SX3009 第 3 層）から 7 点出土した。外洋の潮間帯の砂地に生息する。

## ワスレガイ

直径 5 センチ前後の個体が大形池状遺構（SX3009 第 2 層）から 3 点出土した。平面正円に近く貝殻が厚い。輪肋と放射肋の凹凸はわずかに認められる程度である。オキアサリやチョウセンハマグリと同様に外洋の潮間帯の砂地に生息する。

## ハマグリ

当該調査地で最も多く出土している。出土品は殻長 4cm 前後のものが多い。丸みを帯びた三角形に近く、表面に成長肋がなだらかに認められる。殻頂付近でいちばん膨らみが強い。無紋で黄土色をした殻皮をしているものが多く出土している。内湾の潮間帯砂泥底に生息する。

大形池状遺構（SX4029、SX3009 第 2 層）、SX4064、SX3010、SX3001、SD2004、SX2005、第 1 包含層、側溝掘削、第 2 包含層、攪乱土坑 3 から 180 点出土した。特に大形池状遺構からは 154 点出土しており大多数を占める。チョウセンハマグリと似ているが比べると殻が薄く、少し小さい個体が多い。

## チョウセンハマグリ

殻長 7～10cm 前後の個体が出土した。ハマグリよりも大きい個体で、殻が厚いく、丸みを帯び縁辺がやや直線的で正三角形のようである。外洋の砂地に生息する。当該調査地から多く出土している。大形土坑（SX4029、SX3009 第 1 層、SX3009 第 3 層、T.S-010）、SX4015、SX4064、SX3017、SX3010、SX2005、SD2004、第 2 遺構面、SX1006、第 1 包含層、第 4 包含層から 144 点出土した。特に大形土坑からは 131 点出土しており出土遺構のうち大多数を占める。ハマグリと形状が似ており、合わせた数で考えると、群を抜いた多い数字となる。

## オキシジミ

殻長 4cm前後の個体が出土した。貝殻は薄い硬く、シジミよりも正円状で輪肋がはっきりしているが、肋の角は張っていない。横からみると膨らんでいる印象をもつ。殻縁に小さい刻み目がある。大形池状遺構（SX3009 第 2 層）から 2 点出土している。内湾の潮間帯から水深 20m くらいまでの砂泥底に生息する。

## サルボウガイ

殻長 8cm前後の個体が出土した。アカガイ・サトウガイと非常によく似ており、識別は放射肋の本数で行った。放射肋が 32 本ある。サルボウの放射肋は 32 本前後ある。サトウガイの放射肋が 38 本、アカガイの放射肋は 42 本前後である。サルボウガイの大きさと比べてアカガイは少し大きく、サトウガイはアカガイより大きい。大形土坑（SX3009 第 2 層）、SX2004、SX2009、第 1 包含層から 10 点、C 区第 2 遺構面から 1 点が出土した。破片の貝は、アカガイ・サルボウガイの可能性もある。内湾の干潟に生息する。

## アコヤガイ

破片のために断定できないが、サザエの破片とは異なる形状であり、真珠色をしていることからアコヤガイの可能性が高いとみている。別名シンジュガイ。大形池状遺構（SX3009 第 2 層）、SX2006、SK2010 から 3 点が出土した。浅い水深の岩礁域に生息する。

## イガイ

殻が薄くいずれも破片で出土した。形状は尖るような細長い楕円形で、表面黒色で、輪肋がはっきりしている。大形池状遺構（SX3009 第 2 層）から 14 点出土した。非常に似ているムラサキイガイは大正期に入ってきた移入種。浅い海の潮間帯近くの岩礁に生息する。

## ウチムラサキ

オオアサリとも呼ばれる。名称のとおり内側は濃い紫色をしている。潮間帯から水深 10m の砂礫地に生息する。殻長 10cm前後であり貝殻は厚く成長肋がはっきりしている。アサリの表面の布目状と異なる。第 1 包含層から 1 点出土した。

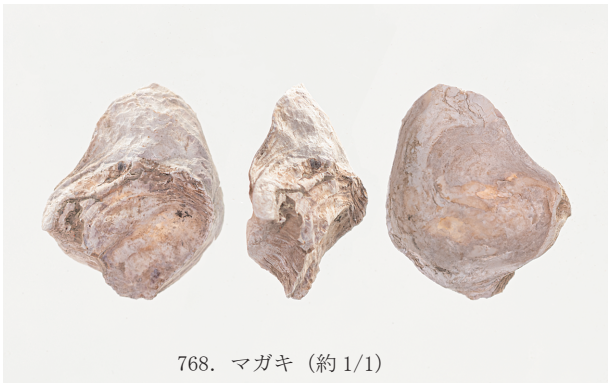
## 【サンゴ】

### イシサンゴ

別名、菊目石である。形状は半球状をしている。第 4 包含層から 1 点出土した。その用途は鑑賞・薬品・防湿材の可能性が指摘されている。『第 57 集』熱帯・亜熱帯の浅海に多く生息する。

貝の選別はあまりにも小さいものが出土していないことから網目の大きさなどを使って行われていたと思われる。

汽水域から吉野川河口より外海にかけての沿岸地域が主たる採集・捕獲地であろう。



768. マガキ (約 1/1)



769. ツメタガイ (約 1/2)



770. イシサンゴ (約 1/2)



771. メガイアワビ (約 1/4)



772. サザエ (約 1/4)



773. アカシ (約 1/4)



774. イワガキ (約 1/4)



775. テングニシ (約 1/4)

第 211 図 出土貝類 1





776. オキシジミ (約 1/2)



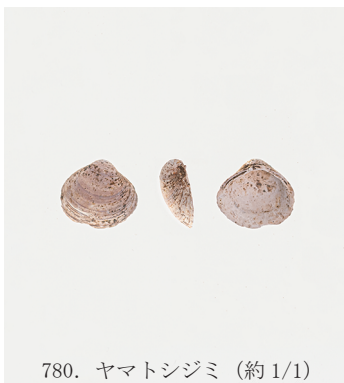
777. ワスレガイ (約 1/2)



778. ハイガイ (約 1/2)



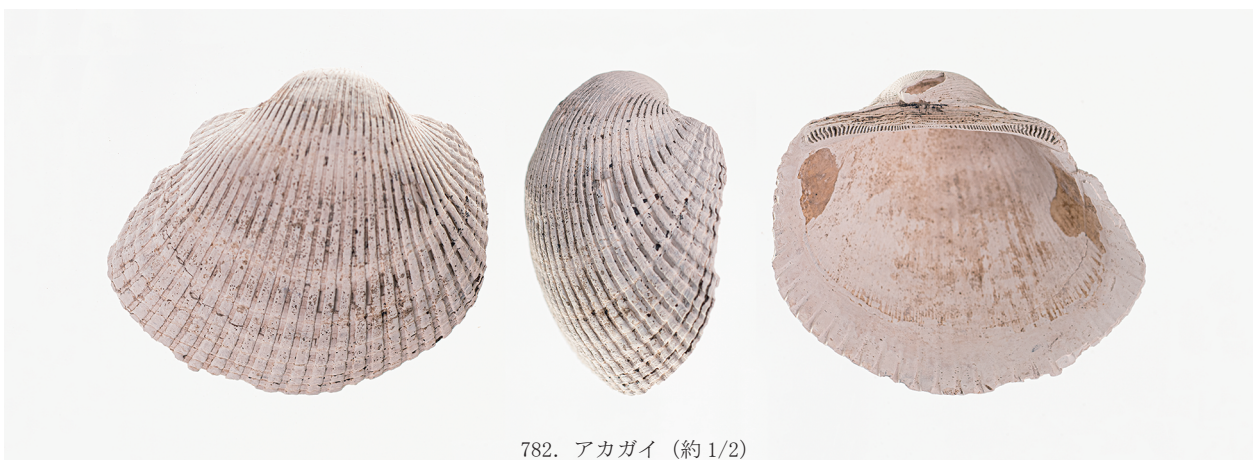
779. カガミガイ (約 1/2)



780. ヤマトシジミ (約 1/1)



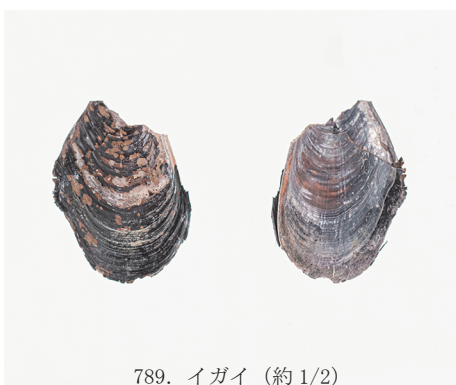
781. サルボウガイ (約 1/2)



782. アカガイ (約 1/2)

第 212 図 出土貝類 2





第 213 図 出土貝類 3

## ⑤ 動物遺存体

### 【哺乳類】

イヌは20点が出土した。脛骨5点、大腿骨5点、上腕骨4点、橈骨3点、頭蓋骨、下顎骨、脛骨が各1点出土した。シカは中手骨4点、中足骨2点、上腕骨3点、橈骨3点、大腿骨4点、肩甲骨3点、脛骨・鹿角は各1点出土した。ネコは、部位が6点出土した。脛骨2点、上腕骨、不明肢、腰椎、頭蓋骨各1点が出土した。ウシは脛骨、肩甲骨、上腕骨、大腿骨各1点が出土した。ウマは脛骨1点が出土した。

### 【魚類】

出土骨類の動物種の判定は、骨の部位で判断するため非常に困難であり、不明としたものは少ない。写真を掲載することで今後の判定材料を提示する。

魚類は当時の重要な蛋白供給源である。

SX3009からコイの尾椎が1点出土した。尾椎は脊柱（連結した脊椎骨）のうち、腹椎より下方にある椎骨で尾を形成する。また、種不明だがSX3010から尾椎5点が出土している。

SX3009から腰帯、血管棘が各1点出土した。

腰帯部は腰帯と鱗条棘からなり、腹鰭とつながる部分である。横突起は脊椎骨の下部（腹部）にある突起で、尾椎にあるものを血管棘という。

SX4024からボラ主鰓（しゅさい）蓋骨が1点出土した。鰓蓋はえらぶたとも言われ、4つの骨（前鰓蓋骨・主鰓蓋骨・間鰓蓋骨・下鰓蓋骨）で形成される。鰓の外面を覆う扁平に広がったひだをいう。これは保護し鰓内に水流を起こす働きがある。

C区SK3018からマダイの舌顎骨が1点出土した。舌顎骨は鰓の骨格である。不明種の腹椎が各1点出土した。

### 【鳥類】

C区SX2002から烏口骨が1点出土した。烏口骨とは肩帯を構成する骨の一つである。両性類と爬虫類と鳥類に発達し、哺乳類は退化している。

SX4104からニワトリの上腕骨が1点出土した。上腕骨は前肢の肩から肘までの長く太い骨である。

SD3008、SK1001、SX3009第2層から鳥類の骨が出土している。骨の規模から鳥と判断した。ただし種類や部位については不明である。

#### 参考文献

松井 章『動物考古学』京都大学学術出版会 2008年





第 214 図 出土した動物遺存体（哺乳類 1）（縮尺約 2 分の 1）





798. ネコ上腕骨 右



800. ネコ脛骨 左



799. ネコ腰椎



801. ネコ頭骨



802. サル肩甲骨



803. ウシ上腕骨 右



804. ウシ脛骨



805. ウマ脛骨 左

第 215 図 出土した動物遺存体（哺乳類 2）（縮尺約 2 分の 1）





806. シカ肩甲骨 左



807. シカ上腕骨 右



808. シカ中手骨 右



809. シカ脛骨 左



810. シカ角



811. シカ  
橈骨 左



813. シカ中足骨 右



814. シカ大腿骨 右

第 216 図 出土した動物遺存体（哺乳類 3）（縮尺約 2 分の 1）



第 217 図 出土した動物遺存体 (魚類・鳥類)



## ⑥ 被熱溶解ガラス

徳島城下町跡徳島町1丁目地点の発掘調査によって被熱溶解ガラスが出土した。被熱溶解ガラスは、その多くが調査区土層堆積の上層部分・整地層や攪乱から出土した。SX1008からも出土しているが、この遺構の出土遺物は後世の遺物が多く混入していた。整地層は熱を受けて炭化した粘質土や砂礫土が混じった土質である。

このような炭化した土質の混じる焼土層は、これまで周辺の徳島城下町跡の発掘調査で確認されている。いずれも第1包含層の上層にあり、現代の整地層の下層に堆積が認められており、空襲による災害後に整地した層位と考えられてきた。

当該調査地は、先述の発掘調査に至る経緯ならびに基本層序の項目で述べた通り、これまで3度の裁判所建設が行われてきた。それによって、近世の遺構面ならびに遺構・遺物が失われることになったが、焼土層の年代を土層堆積の順序から以下に確定させることができた。

当該調査地にかつて建てられていた裁判所ははじめ、明治11年に建設されたが、昭和20年の空襲によって庁舎は一時消失している。その後、昭和24(1949)年に木造二階建庁舎を再建し、さらに昭和41(1966)年に鉄筋三階建庁舎が建設されている。

AB調査区の第1遺構面は、青石を列状に2条延ばした建物基礎によって損壊を受けていた。また青石建物基礎は調査区外東へと延びていた。昭和41年の建物基礎は遺構面ならびに青石の基礎を壊し掘り下げられていたため、層位の前後から青石の基礎は昭和41年の建物よりも古いことがわかる。その結果、ここで青石の基礎が明治11年の建物か昭和24年の建物のどちらかに使用されたとなる。

そして青石の基礎は、その下に丸太杭を組んで地盤を強固にするばかりか、青石を強固にするためにその隙間や上にコンクリートで補強していた。コンクリート使用が、明治11年の建物とは考えられず、この青石と丸太杭の基礎は昭和24年の建物に属すると考えられる。

青石の基礎は調査区外の東へ延びていることから、調査区東壁面を観察すると、この昭和24年の青石を据えるための掘形に切られて存在するのが焼土層であるとわかる。よって、この焼土層は昭和24年に直近で起こった火災を伴う災害の整地層といえる。そのような大規模な火災は昭和20(1945)年6月から7月にあった空襲による災害にほかならない。この災害は、7月4日未明に起こった徳島大空襲を含め7回受けている。このことから、焼土層は徳島が空襲にあった時の災害を整地した層位であり、そこから出土した溶解ガラスは空襲の被害を被った遺物といえるだろう。

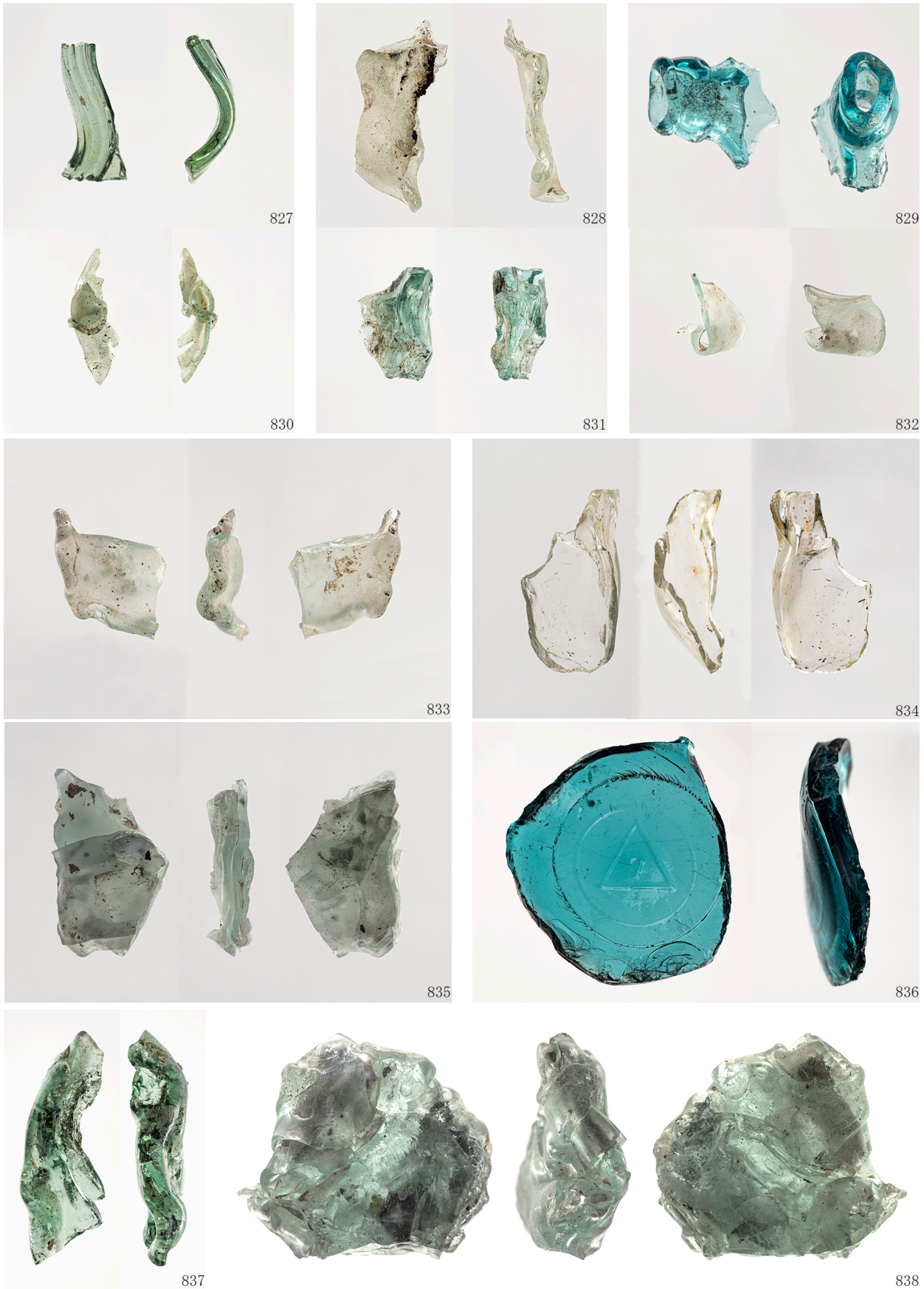
ガラスが溶け変形する温度は約700℃以上であることから、調査区から出土した溶けて変形の認められるガラス片は、焼土層から出土していなくても、徳島の空襲により火災したものがなんらかの影響で流れ込んだものとみてとれよう。

### 参考文献

『徳島大空襲 徳島の自然と歴史ガイド No.4』徳島県立博物館 2005年

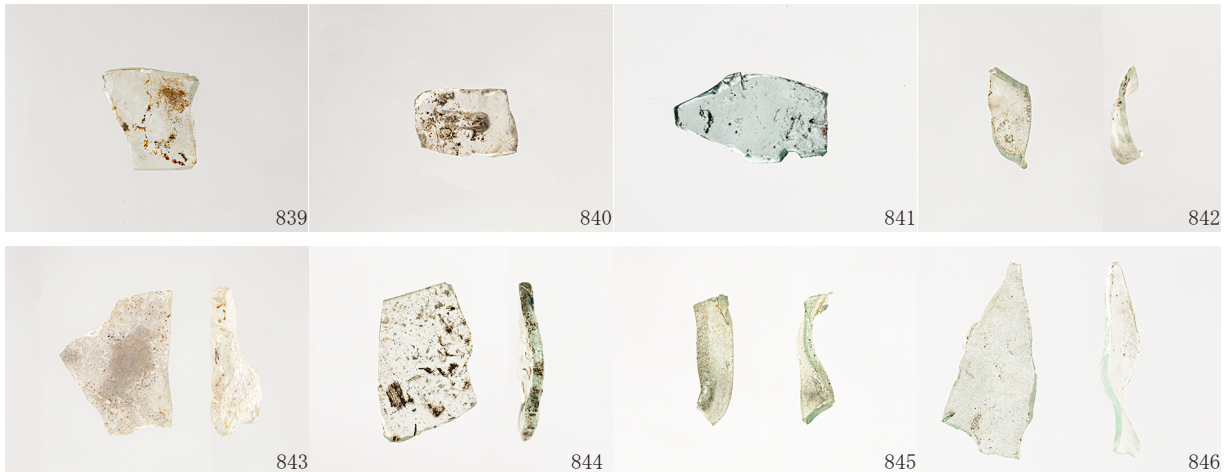
『徳島市史 第一巻 総説編』徳島市市史編さん室 1973年

『徳島市史 第五巻』



第 218 図 被熱溶解ガラス 1 (縮尺 1/2)





第 219 図 被熱溶解ガラス 2 (縮尺 1/2)

### ⑦ トレハロース含浸法による木製品保存処理

出土木製品は、木簡や漆塗製品など希少な優品や下駄・枡・傘・箸・漆椀・曲物など様々な当時の日用品が含まれていた。

出土後に、それら木製品をそのまま空気中に長期間放置すると、変形収縮してしまい資料的価値を失ってしまう。そこで木製品の形状を保つために化学的な木製品の保存処理を施した。

#### (木製品の保存処理)

木製品は、長い年月土中にあると、有機物を分解する腐朽菌やバクテリアなどの微生物によって通常朽ち果て遺存しない。そのため発掘調査の出土遺物は、しばしば土器と比べ木製品の出土量が少ない。ところが海底や地下の特殊な環境の下、飽水状態と酸素欠乏状態が長期間継続した場合に、微生物が活動を停止し木製品が遺存する。微生物が木材の細胞壁を破壊し水が細胞にまで達することで飽水状態となり、微生物の酸素が欠乏するためである。外見上は形状を保っているようにみえても、微生物によって細胞壁は破壊されている。そのため水分によって内部が支えられてきた木製品は、そのまま乾燥させると変形収縮し破損する。また、発掘調査後、長期間に水漬け保管すると、再び微生物の活動によって木材の細胞壁の破壊が進み脆弱化する。

よって木製品を崩れることなく乾燥した状態に保つためには、内部の水と薬剤を入れ替えて、薬剤を浸透させ固形化する必要がある。この行為が木製品の保存処理である。木製品の保存処理には、それに特化した専門的な知識と、豊富な経験を必要とする工程が多く、これまで専門の会社に外部委託を行ってきた。また今も脆く修復を必要とするような取り扱いが困難な遺物は外部委託を必要としている。

今回、当該施設で多量の木製品の保存処理を行うことにした。それを可能にしたのは、トレハロースを含浸させる水浸木製品の保存処理法である。トレハロース含浸法はかつて当該センターが行っていたポリエチレングリコール (PEG) 含浸法やラクチトール含浸法に比べ、安価で処理工程が簡易であり、加えて短期間で行え、複雑で熟練を要する作業がない。また短時間で結晶性が望めるため含浸硬化がしやすく、寸法安定性が飛躍的に向上した。

このような特徴を生かしたトレハロース含浸法は、2001年にラクチトールとトレハロースの混合含浸法が提案され、その後2011年にトレハロース単独での含浸法が提案された。近年、各地でトレハロース単独の保存処理が行われ良好な結果が報告されてきている。そこには処理工程の改良と工夫が進められており、情報共有が図られている。報告を参考に以下の方法で保存処理を行った。

## 保存処理手順

当該センターでのこれまでのラクチトールを含浸させる木製品の保存処理方法（水溶液濃度、各濃度の含浸期間、管理台帳など）を参考に、トレハロースによる含浸を行った。

トレハロース水溶液の濃度を35%、55%、60%、70%と設定し、低濃度から高濃度へと段階的に含浸していった。各濃度含浸は水溶液を交換して行い、濃度判定には濃度計測器を使用した。また、含浸期間については、木製品の体積で大きく4つのタイプに区分した。また漆器碗（漆塗製品含む）については別でタイプを設けた。それぞれのタイプの名称を主な器種を代表名とし、箸タイプ、円板タイプ（曲物の底板）、部材・下駄タイプ、柱・杭タイプ、そして漆器タイプに分けて含浸期間の計画を立てた。それぞれの遺物は体積が当然異なるため本来は含浸期間が様々であるが、木製品の各濃度含浸期間は満了した状態であっても、期間延長は問題が全くないため、計画管理がしやすい5タイプの区分を採用した。

木製品の含浸期間の計画表は、タイプごとに各濃度の含浸終了予定期間が日付で記入設定されているため、次の濃度への移し替えの日が分かりやすくなっている。また含浸が終了した濃度については、日付に色をつけて進捗度合いを可視化して確認していった。

含浸が進んでいる目安は、トレハロース水溶液中の木製品の浮沈で判断した。（註1）含浸終了予定期間が過ぎても浮いている遺物については沈むまで含浸を継続した。遺物によっては徐々に含浸が進むにつれ少しずつ沈んで浮力を失っていくものが認められた。一方で、含浸期間を大幅に延長しても沈む気配がなく、一向に浮力を失わずにいる遺物も存在した。このような木製品の場合には、内部から気泡が徐々に外へ出ているかを確認した。気泡が出ている場合には、気泡が無くなるまで含浸期間を延長した。水に溶けない紙タオル（キムワイプ）で覆い、気泡の有無を確認した。結果、気泡がなくなってもすべての木製品は浮いていたが、この気泡の有無で次の段階への目安とした。なかには、柱・杭タイプの遺物に、49日間35%含浸を行ったものがある。

始めの含浸である35%濃度の時に、この浮力・気泡の有無などの含浸の特徴を見極め、それに従って55%濃度、60%濃度、70%濃度と順次段階的に含浸していった。

濃度35%含浸は常温で行った。実験の結果、40%以下の濃度では常温で結晶化することなく水に溶けた状態で安定し、50%濃度では常温だと緩やかに結晶化が進むことが分かっている。実際には32%～35%の濃度となるように設定した。こまかな濃度の違いは保存処理の精度に差は実感としてなく、水溶液作成の際の許容範囲と捉える。また、濃度が低いほど水溶液作成が容易で、なおかつ木製品に含浸しやすいと思われるが、30%濃度以下の濃度を段階的に含浸させても保存処理の精度に差は実感としてなかった。これは時間を費やし手間が増えることとなる。

次の55%濃度と60%濃度の含浸にはPEG含浸槽装置を用いた。PEG（ポリエチレングリコール）含浸槽装置とは、遺物をPEG槽内に直接置き、槽内に貯められたPEG水溶液をかき混ぜながら、温水槽から延びたパイプを使って間接的に熱を伝導して温めて含浸させる機械である。このPEG含浸装置は、

槽内の水を一定の高温度に保つことができるので、トレハロース含浸法でを使用した。具体的には、PEG 槽内に木製品を納めたタッパーなどの容器を設置し、槽内に貯めた温水の蒸気によって容器ごと温めて含浸させた。

55%濃度は漆器の含浸濃度上限であり、漆器はそれ以上の高濃度ならびに加熱温度にすると漆膜が脱落・変形する恐れがある。実際には50%～55%濃度で含浸を行った。特に漆器以外の木製品は、次に行う60%濃度と濃度値が近いため、50%を下回らなければ良いと認識して行った。漆器の場合は最終含浸段階であるため、なるだけ55%となるように濃度を設定した。次の60%濃度では、前段階の55%、次段階の70%を見据えて、58%～61%濃度となるように設定した。PEG 含浸槽装置は55℃に設定しているため、65%濃度以上とすると、水溶液交換などの出し入れ時の取り扱いが雑な場合には結晶化が起これるので注意が必要である。

次に70%濃度では、熱風式循環乾燥機を70℃に設定して含浸させた。70%濃度は、扱いを誤るとすぐに結晶化が起きてしまい、ほぼ濃度作成の上限に近い。丈夫な遺物については高濃度（75%以上）含浸も検討したが、70%以上の濃度は結晶化が速やかに進行してしまい、75%濃度作成は相当な困難さであった。また、熱風式循環乾燥機の場合には、容器の蓋に隙間が空いていると、容器内の水溶液の水が蒸発して濃度が上がり、結晶化が起きてしまう。結晶化したトレハロースが木製品の外部に付着する。このまま取上げて風乾とすると、遺物表面に結晶化したトレハロースを除去することが難しくなるので容器の密閉確認の必要性を実感した。

70%濃度の含浸を終え取上げてすみやかに、10秒までを目安に木製品を70℃の温水に潜らせて洗浄した。この方法により比較的木製品の表面が自然な色調を得られ良好な状態で風乾へと移行できる。（註2）この温水洗浄は表面のトレハロースを溶かすことから薄いものや脆いものには不向きである。そのため木簡など薄い板状のものは、常温水洗浄が効果的である。10秒までを目安に木製品を常温水に潜らせて洗浄する。また、亀裂が大きくて、破損しそうなものは、取上げ後に洗浄をせず、そのまま風乾を行う。漆碗は漆を強化するためにディッピングを行う必要がある。（註3）また木製品が細かく破損しそうなものもディッピングを行うのが有効である。

風乾・結晶化の期間は、重量変化の測定値結果を参考にして設定した。（註4）風乾の時間経過によって、トレハロースが結晶化してくるため、風乾終了後にトレハロースを除去した。トレハロース除去は水を含ませた筆で行った。結晶化が著しいものについては温水を筆に含ませて行った。ここまで行った木製品は、表面の色調が黒っぽい。結晶化したトレハロースは、高湿度環境でも吸湿しない特質があることから、風乾による木製品硬化後に再度エチレンジアミン四酢酸二ナトリウム塩（EDTA-2Na）（商品名クレワットN）に約0.5～1時間漬けて、表面の色調を整えた。この方法は、冷却・乾燥方法の工程に20℃程度の水に5～10分程度浸けて冷却する方法の改良である。漬け終わると、すみやかにキムワイプで表面の水分を拭き取る。十分に拭き取らないと、持ち手の痕跡が風乾後に明瞭に残る場合があるので注意を要する。

漬け終えた当初は、遺物の表面が柔らかいが、再び風乾を行うと、硬化して安定する。遺物の折れ曲がりや認められる場合には、柔らかいうちに重しで圧をかけて、そのまま風乾を行い、遺物本来の形状になるよう修正した。色調も茶色の木材本来の色に近いと感じるものになった。

その後、破損部位の接合、さらに脆弱部分の筆によるディッピングにより硬化させ、最後に不要な汚れや表面のトレハロースを除去し整えて完成である。



註1：宮崎県埋蔵文化財センターでは、含浸具合を重量測定によって判別している。

これは数値化するため進捗状況が分かりやすいところが良いものの、多量の木製品の重量を正確に何度も測るには作業時間をあまりにも費やすことになるため採用せず、今回は浮沈とラクチトール含浸による含浸期間を基に判別した。

柳田晴子 2015「宮崎県でのトレハロース含浸法処理事例（1）」『宮崎県埋蔵文化財センター研究紀要第3集』

註2：鹿児島県立埋蔵文化財センターで行われている方法である。

永瀆功治・内山伸明・中村幸一郎 2012「トレハロースを用いた木製品の保存処理（Ⅰ）」『縄文の森から 第5号』

榎本美里 2013「トレハロースを用いた木製品の保存処理（Ⅱ）」『縄文の森から第6号』

註3：トレハロース70%濃度の水溶液中に10秒ほど浸け、表面を対象遺物よりも高濃度のトレハロースで補強する方法。

木製品の保存処理の全体的な方法については以下の論文内容を基にしている。

伊藤幸司・藤田浩明・今津節生 2013「ラクチトールからトレハロースへー糖類含浸法の新展開ー」『考古学と自然科学』第65号

註4：註2と同様

註5：註2と同様

## IV. まとめ

### 第4遺構面の成果

SX4029にある南北方向に直線的に延びる溝跡部分と、それに沿うように柱穴跡が均等間隔にならぶ柵列跡(SJ4001)を確認した。この溝跡部分と柵列跡によって、土地を東西に区画していることがわかった。第4遺構面において、このように大規模なものは他になく、この溝部分と柵列跡は屋敷境と考えられる。それは絵図では、区画の西は「新御蔵」であり、東は「森甚太夫」家に該当する。この溝跡と柵列跡は、他の徳島城下町跡の屋敷地の境界溝などと比べて、大規模であることがわかった。絵図のとおりならば、藩蔵と中老の屋敷地が厳密に区分されていたことがいえるだろう。

土地を区画する溝は、2条が並行して直線的に延びる傾向にあるが、第4遺構面においては、SX4029の溝跡部分の西に、並行するように延びる直線的な溝跡は認められなかった。第3遺構面のSD3016とSX4029の溝跡部分は同じ位置で確認できたのに対し、SX3027と同じ位置の第4遺構面では溝跡などは確認できなかった。つまり、第4遺構面は溝と柵列によって屋敷地を区画しているが、第3遺構面では2条の溝によって区画していたことになる。

この大規模な区画溝の西にあり南北方向に直線的に延びる溝(SD4006・SD4012・SD4022・SK4134)は、「新御蔵」の敷地内を東西に区画するものと考えられる。一方で、この幅1.22mを測る直線的な溝の南端部から東へほぼ直角に折れ曲がるように延びるSD4016は、同じく土地を区画する溝跡であるが、幅2.32mと若干規模が大きい。

調査区西側の「新御蔵」にあたる部分、SX4029の溝部分より西側の調査面では、柱穴跡を多量に検出することができた。「新御蔵」では多くの建物が存在していたことが窺える。これは第3遺構面でも多量に柱穴跡を検出することができたことから同様のことがいえるだろう。

第4遺構面の各遺構から出土した遺物は、16世紀末から17世紀中ごろを中心とする年代である。

### 第3遺構面の成果

南北方向の直線的な2条の溝跡(SD3016・SX3027)と、SD3016に接し繋がる大形池状遺構(SX3009)を検出した。平行する大型の2条の溝跡は、城下町跡の新蔵町1丁目地点では、上級家臣の佐渡家と戸田家の屋敷境と考えられている。この当該調査地点の2条の溝跡も同様の屋敷境の機能を有していると考えており、つまり境界の西の屋敷地は「新御蔵」であり、東の屋敷地が「森甚太夫家」の敷地を分ける溝である。藩の米蔵である「新御蔵」と中老で水軍大将である「森甚太夫」家の敷地を分けるにふさわしい大規模な区画溝である。

この大規模な区画溝の西にあり南北方向に延びる溝(SD3006・SD3010)は、「新御蔵」の敷地内を東西に区画するものと考えられる。一方で、この幅0.8mを測るSD3006南端部から東へほぼ直角に折れ曲がるように延びるSX3001は、同じく土地を区画する溝跡であるが、若干規模が大きい。SX3001は幅1.36mを測る。

この溝跡は、第4遺構面で検出した南北方向の直線的な溝(SD4006・SD4012・SD4022・SK4134)とほぼ同じ位置であった。第3・第4遺構面を通じて土地区画、「新御蔵」敷地内の区画に変化がなかったといえるだろう。

屋敷地を区画する溝に繋がって検出したSX3009は大規模な池状遺構である。そこから様々な遺物



が出土した。良品も多く、大量生産品であるが 193・194 の絵唐津の輪花皿は、見込み内面に同様の松を描き、揃いの皿であったことが分かる。また 197 の肥前産の磁器小碗は 17 世紀中頃のもので、完全な形で出土した。そのほか習書の木簡や金時絵で草木を描いた漆工芸品の部材片など、当時の生活が想像される遺物が数多く出土した。SX3009 の出土遺物は、第 3 遺構面の年代に合致する 17 世紀後半から 18 世紀後半の遺物が出土する一方で、絵唐津の皿のように 16 世紀末から 17 世紀前半の遺物も出土する。下層にある SX4029 の大形池状遺構と位置が同じであることから SX4029 出土とする遺物も含まれている可能性が高い。しかしながら、その区別は困難を極めている。区別するよりも大形池状遺構が作られた 16 世紀末から 18 世紀後半に埋没するまで、長きにわたって機能していたと理解したい。

この大形池状遺構の屋敷地内での位置を絵図にあてはめると、西は「新御蔵」との境、南は「笹山」もしくは「位田」家との境に位置する。絵図の敷地に書かれた森甚太夫の文字から北面が「森甚太夫」家の正面であると窺われる。そうすると池状遺構は、敷地裏手の奥に作られたと思われる。

森家の敷地内の建物の状況について、第 4 遺構面ならびに第 3 遺構面の柱穴の並びなどによって、建物配置を検討することは今後の課題である。

そのほかの第 3 遺構面の各遺構の年代は、17 世紀中ごろから 18 世紀後半を中心としている。

## 第 2 遺構面の成果

第 2 遺構面の年代の根拠が多角的に実証できた。

1 つ目は「文政四・・・」と墨書された瀬戸美濃産の練鉢（635）が SX2016 から出土した。文政 4 年は 1821 年のことであり、SX2016 の年代が 1821 年の近似値であるといえる。文政年間は 1818 ～ 1831 年の間であるから、これ以降、年代が新しくなる可能性は低い。

2 つ目は AB 区 SK2016、SX4035（第 2 遺構面の遺構）から出土しているピラ掛け碗である。萩焼のこの釉薬の掛け方が特徴的な小碗は、粘性の強い鉄釉と長石釉を線状に網目のように交差させている。このピラ掛け碗は 18 世紀後半以降の年代であり、18 世紀に遡る事例は報告されていない。またピラ掛けの端反碗など口径約 9 ～ 10cm、器高約 5・6cm の小碗は、山口県深川窯本窯 4 号窯期で大量に出土しているように 19 世紀前半の年代である。

ピラ掛け碗は城下町調査の報告書をみると、各調査から 2・3 点の出土であるが、その特徴的な外観から、今後、遺跡の年代決定の足掛かり、考証の糸口になる。

3 つ目は、刻印瓦の年代である。先述した当該遺跡から出土する瓦の「谷川孫八」「瓦屋」「嘉兵衛」「武右衛門」の刻銘をもつ瓦の年代は、18 世紀に活躍した刻印「瓦師」より新しい、概ね 18 世紀末から 19 世紀前半と考えられる。

4 つ目は、第 2 遺構面の遺構出土として報告してきた広東碗など遺物の年代が、はみ出すように古い時代の遺物が紛れ込むことがなく、概ね 18 世紀後半から 19 世紀前半ころとである。

以上のことから、第 2 遺構面の年代は、18 世紀後半から 19 世紀前半と確証し、さらに 19 世紀前半を中心とする文政 4 年、1821 年を中心に据えて考えられる。

## 屋敷境の溝跡について

次に、年代確定の根拠とした刻印瓦が出土した SD2003・SD2004・SD2007 は、直線的で南北方向に延びる溝である。これは東西の敷地を区画する溝となっており、そのような溝は屋敷境とする溝のほ

かは考えにくい。屋敷境の溝は主に2条で一組と考えると、SD2007が、SD2003とSD2004の距離よりも若干離れていることは示唆的である。SD2007は、SD2003・SD2004と異なる条件により作成された屋敷境の溝となる可能性がある。

第3遺構面で考えられた屋敷地境となる溝よりも東へ最小4mの位置がSD2004となり、東へ最大12mの位置がSD2007となる。各年代の敷地範囲は、何らかの重大事象で変化していたといえるだろう。他の絵図と比べると、阿波城下図（元禄年間1688～1704年）には、「新御蔵」と「森甚太夫」の敷地境の位置が異なっていて、「森甚太夫家」の敷地が狭くなり、「新御蔵」敷地が東へ延び広く描かれている。絵図にも反映している可能性がある。

## 第1遺構面

C区SX1002で検出した石列とその一つであるホゾ穴を穿つ礎石は注目される。礎石の規模は0.76×0.88m、厚さ0.46mと大規模であり、大人8人の人力で動かすほどの重量であった。この礎石と同等の礎石を調査区内で検出できなかったことから、礎石が家屋の基盤となるようには考えにくい。そのため、礎石は調査区南端部で検出したことから、対になる礎石はその南に存在し、門柱の礎石として機能していたと想定する。その門柱は直径約22～26cmと想定する。

そのほかホゾ穴を穿つ礎石は、C区SX1003内で1基、第2遺構面C区で各1基を検出した。

C区SX1003・SX1004で検出した石列は、礎石となるかのような等間隔に大きな石を並べている所もあり、排水施設としての機能以外も持ち合わせている可能性もある。また、SX1003の石群の下で検出した平瓦を立てて充填した掘形は、その強固さから真上に柱を据えるための栗石や基盤の機能を有していたとも考えられよう。この地が絵図の通り蜂須賀家の米倉「新御蔵」ならば、この石列群は、米を貯蔵するための排水機能を有するものであったと想定する。その使用方法は、石列群が密集して異なる向きや並列する様子がどのような目的によるのかを判明させることは今度の課題である。

第1遺構面で検出した土製の水管（633）を1点掲載した。第1遺構面の年代（19世紀中ごろ）よりも新しい年代である。今後の近世末から近代の排水施設を検討する際の資料となろう。

### 参考文献

- 『図説 江戸考古学研究事典』江戸遺跡研究会〔編〕 柏書房 2001年
- 『徳島城下町跡徳島町1丁目地点 徳島県埋蔵文化財センター調査報告書第88集』2016年
- 『国内出土の肥前陶磁 北海道から沖縄まで』佐賀県立九州陶磁文化館 1984年
- 『徳島城下絵図』徳島城博物館 2000年



## 遺構一覧表・遺物観察表



B区 第3遺構面調査状況（南から望む）

掲載番号	種別	器種	調査区	遺構	属位・位置	口径・縦	器高・横	底径・高	備考
634	陶器	甕	B	第3包			(7.2)	20.2	底部外面に「上六」と墨書有
635	陶器	鉢	A	SX2016			(4.7)	15.2	高台高0.9cm見込み3ヶ所露胎 外面底部墨書「文政四〇〇・・」(文政4年は1821年)
636	陶器	鉢	A	SX1012		19.1	11.2	12.8	文字有 底部外面墨書「庄」 見込み5ヶ所露胎 4ヶ所胎土目 貫入
637	陶器	すり鉢	B	SX4035		24.6	8.7	12.7	スリ目(12条/3.0cm)片口播鉢 明石産「久喜」の刻印 底部外面「・・子」の墨書
638	陶器	鉢	B	SK3001		20.2	10.0	13.1	文字有 重ね焼きの跡 5ヶ所 内外面 貫入 底部裏に山万講に関連する墨書、外面「宕」と墨書
639	陶器	香炉	B	SE3001					墨書
640	陶器	碗	B	SX3010					
641	陶器	甕	B	第3包					
642	陶器	皿	B	第4包			(0.8)	4.0	底部外面 墨書有
643	陶器	鉢鉢	B	第4包			(2.2)	15.8	内外面 貫入あり 重ね焼きの跡1ヶ所あり 瀬戸美濃産
644	陶器	鉢	B	SP4135	ⓈPS=1/20 図		(3.4)	9.5	重ね焼きの跡 4ヶ所あり 底部裏に文字有
645	陶器	鉢鉢	A	SX2016		20.8	9.7	13.5	内外面 貫入外面体部と底部裏に墨書 重ね焼きの跡3ヶ所 瀬戸美濃産

表1-1 出土墨書土器

掲載番号	種類	調査区	遺構	層位・位置	瓦当直径	文様直径	玉縁長さ	玉縁厚さ
646	蓮華文	B	SX3009-A	第3層	長さ(15.1)	幅(7.6)	厚さ 3.5	
647	橘文	B	SX3002-B		長さ 13.2	幅(8.0)	厚さ 2.1	(9.8)
648	車輪状	B	SD2004		長さ 9.0	幅(13.8)	厚さ 4.5	1.9
649	巴文	B	SX3009-B	第1層(砂層)	高さ 15.5	幅 15.6	0.9	厚さ 2.0
650	菊文	A	SX3018-A		長さ(6.6)	幅 7.5	厚さ 2.5	1.8
651	菊文	A	SD2004		長さ 11.2	幅 11.1	厚さ 1.9	1.4
652	車輪状	A	SD2004		長さ 15.8	幅(8.9)	厚さ(3.5)	—
653	卍文	C	SX2003		長さ(11.8)	幅(6.6)	厚さ(1.7)	—
654	卍文	C	SX1003		長さ(7.7)	幅(7.9)	厚さ(2.7)	—
655	卍文	B	第1包		長さ(8.1)	幅(7.5)	厚さ 3.7	—

表2-1 出土軒丸瓦・隅瓦



成形・調整（分様）	胎土	胎土密度	焼成	残存率	色調
(外面 内面) 回転ナデ	0.2~3.0mm 石英 長石	精	良	以下	(外面) 5YR 2/1 黒褐 (内面) 2.5YR 4/2 灰赤
(外面) 回転ナデ後高台削り出し後施釉 (内面) 回転ナデ後施釉		精	良	以下	(外面) 8Y 7.5/3S グレイみの黄 2.5Y 7/2 灰黄 (内面) 2.5Y 6/4 にぶい黄
(外面) 回転ナデ後底部（高台?）削り出し後施釉 (内面) 回転ナデ後施釉		精	良	0.98	(外面) 8Y 7.5/3S グレイみの黄 2.5Y 8/2 灰白 (内面) 8Y 7.5/3S グレイみの黄
(外面) 回転ナデ後口縁凹線2条指おさえ後体部 底部へラナデ後 刻印（体部下部）（内面）回転ナデ後口縁凹線1条・指おさえ	0.1~1.1mm 石英、長石、 雲母、片岩、砂岩、黒色粒	やや精	良	1/2	(外面) 10R 4/6 赤 (内面) 10R 4/4 赤褐
(外面) 回転ナデ 削り出し高台（内面）回転ナデ	0.1~1.4mm 金雲母 石英	精	良	1/3	(外面 内面) 施釉 7.5Y 7/3 浅黄 露胎 2.5Y 8/1 灰白
(外面) 回転ナデのち回転糸切り (内面) 回転ナデのち施釉		精	良	以下	(外面) 2.5Y 7/2 灰黄 (内面) 8Y 8.5/3S うすい黄
(外面 内面) 回転ナデ	0.1~0.6mm 石英 雲母	精	良	以下	(外面) 2.5Y 8/2 灰白 (内面) 施釉 7.5Y 7/2 灰白 重ね焼きの跡 5Y 8/1 灰白
(外面) 回転ナデ 削り出し高台 (内面) 回転ナデ	0.1~3.8mm 雲母 石英 長石	精	良	以下	(外面) 2.5Y 7/4 浅黄 (内面) 施釉 2.5Y 4/1 黄灰 露胎 7.5YR 4/3 褐
(外面 内面) 回転ナデ後施釉	0.4~4.0mm 石英	精	良	以下	(外面) 施釉 5Y 8/3 淡黄 露胎 2.5Y 8/2 灰白 (内面) 5Y 8/3 淡黄

表1-2 出土墨書土器

調整	胎土	胎土密度	焼成	残存率	色調
(内面) 板ナデ	0.1~7.0mm 石英 雲母	やや精	やや良	1/3	(外面) 2.5Y 3/1 黒褐 (内面) 2.5Y 5/1 黄灰
(内面) 板ナデのちユビナデ	0.2mm 石英	やや精	やや良	1/4 以下	(外面) 10YR 4/2 灰黄褐 (内面) 2.5Y 7/2 灰黄
(内面) 板ナデのち指ナデ	0.1~0.4mm 石英	精	良	1/4 以下	(外面) N 2/0 黒 (内面) N 4/0 灰
(成形・調整（文様）） (内面) 板ナデのちユビナデ	0.2~0.4mm 長石 石英	やや精	やや粗	95%	(色調) (外面) N 4/0 灰 (内面) N 5/0 灰
(外面) 指ナデ (内面) 板ナデのち指ナデ	0.1~0.9mm 雲母 石英	精	良	1/4 以下	(外面 内面) N 4/0 灰
(内面) 板ナデのち指ナデ	0.2~1.6mm 石英	精	良	1/4 以下	(外面) N 3/0 暗灰 (内面) N 4/0 灰
	0.1~0.6mm 雲母 石英	やや	やや良	1/4 以下	(外面) 5Y 2/1 黒 (内面) N 7/0 灰白
(内外面) 板ナデ	0.1~0.2mm 雲母 長石	やや精	やや良	1/4 以下	(外面) 5Y 3/1 オリーブ黒 (内面) 5Y 4/1 灰
(内外面) 板ナデ	0.2~2.0mm 石英 長石	やや精	やや良	1/4 以下	(外面) N 3/0 暗灰 (内面) N 4/0 灰
(内外面) 板ナデのち指ナデ	0.2~3.0mm 石英	やや精	やや良	1/4 以下	(外面) N 3/0 暗灰 (内面) N 5/0 灰

表2-2 出土軒丸瓦・隅瓦

掲載 番号	調査区	遺構	分類	器種	長さ	幅	厚さ	成形・調整（文様）
676	A	SD2007	1類	軒丸瓦	2	15	1.8	
677	A	SD2004	1類	鳥衾	9.4	14.8	2.5	
678	A	攪乱	3類	軒丸瓦	2.1	15.4	2.1	
679	A	SD2004	3類	軒丸瓦	13.1	15.4	1.5	(内面) 板ナデ
680 712	B	SD2004	3類	軒丸瓦	(15.3)	(14.8)	9.5	
681	B	SD2004	4類	軒丸瓦	118	15.6	2	
682	B	攪乱（基礎設置溝）	4類	軒丸瓦	—	15.5	1.7	
683	A	SD2004	4類	軒丸瓦	(4.2)	(2.8)	—	
684	B	SD2004	1類	軒丸瓦	3.1	8	1.6	
685	B	SD2003	1類	軒棧瓦	3.6	12.3	10.9	
686	B	第4包	2類	軒棧瓦	9.2	8	—	(外面 内面) 瓦当貼付のちへラナデ・ナデ
687	A	SD2005	2類	軒棧瓦	13.8	8	2	(外面 内面) 瓦当貼付のちへラナデ・ナデ
688	B	SK2021	2類	軒丸瓦	2.1	8.2	2.1	
689	B	SD2004	3類	軒棧瓦	7.2	—	2	(外面 内面) 瓦当貼付のちへラナデ・ナデ
690	B	SD2004	3類	軒丸瓦	—	10.3	2.5	
691	A	SD2004	4類	軒棧瓦	16.7	19.2	1.8	(外面 内面) 瓦当貼付のちへラナデ・ナデ
692	A	第3面	4類	軒丸瓦	—	8.2	3.5	
693	B	SD2004	5類	軒丸瓦	3.2	10.1	1.9	
694	A	SD2004	5類	軒丸瓦	5.9	5.1	1.6	

表5-1 稲追二束文瓦1

胎土	胎土 密度	焼成	残存率	色調	備考
0.1~1.5mm 長石 雲母 黒色班粒	精	良	1/4 以下	(外面 内面) N 5/0 灰	
0.1~5.0mm 石英 長石 雲母 黒色班粒	やや精	並	1/4 以下	(外面 内面) N 5/0 灰	
0.1~0.6mm 雲母 石英	精	良	1/4 以下	(外面 内面) N 4/0 灰	
0.2~3.6mm 長石 黒色班粒 雲母	精	良	1/4 以下	(外面) N 6/0 灰 (内面) N 5/0 灰	
					「谷川瓦屋武右衛門」
0.2~1.2mm 石英	精	良	1/4 以下	(外面) N 4/0 灰 (内面) N 5/0 灰	
0.2~1.0mm 石英	精	良	1/4 以下	(外面) 10Y 3/1 オリーブ黒 (内面) N 4/0 灰	
			1/2		「谷川嘉兵衛」瓦当直径 9.4cm
0.2~1.0mm 石英	精	良	1/4 以下	(外面 内面) N 5/0 灰	
0.1~0.6mm 雲母 石英	精	良	1/4 以下	(外面 内面) N 4/0 灰	
0.1~5.1mm 石英 長石 雲母	やや精	良		(外面 内面) N 3/0 暗灰	瓦当直径 8.0cm
0.1~1.0mm 石英 長石 雲母 赤色班粒	やや精	良	1/4 以下	(外面) N 4/0 灰 (内面) N 3/0 灰	
0.1~0.5mm 長石 雲母	精	良	1/4 以下	(外面 内面) N 4/0 灰	⑦図
0.1~3.0mm 石英 長石 雲母 黒色班粒	精	良	1/4 以下	(外面 内面) N 3/0 暗灰	瓦当直径 8.5cm
0.2~8.6mm 黒色班粒 石英	精	良	1/4 以下	(外面) N 4/0 灰 (内面) N 5/0 灰	
0.1~1.5mm 石英 長石 雲母	やや精	やや良	1/4 以下	(外面 内面) N 4/0 灰	瓦当直径 8.5cm
0.4~0.8mm 長石 石英	精	良	1/4 以下	(外面) N 4/0 灰 (内面) N 5/0 灰	
0.2~1.4mm 長石	精	良	1/4 以下	(外面 内面) N 4/0 灰	
0.2~0.6mm 石英	精	良	1/4 以下	(外面) N 3/0 暗灰 (内面) N 4/0 灰	

表 5 - 2 稻追二束文瓦 1



掲載 番号	種類	調査区	遺構	出土 位置	刻印	刻印 位置	縦	横	長さ	備考
695	丸瓦	B	SD2004		「谷川嘉・・・」	凸面	(14.0)	(6.6)	1.5	欠損して読めず
696	丸瓦	B	SK2021		「谷川嘉兵衛」	凸面	(7.2)	(5.8)	1.6	
697	軒丸瓦	A	SD2004		「谷川嘉兵衛」	凸面	(15.0)	(14.5)	9.3	稲追二束文瓦
698	丸瓦	B	SD2003		「谷川嘉兵衛」	凸面	(10.3)	(5.1)	1.7	
699	飾瓦	A	SD2007		「谷川嘉兵衛」	側面	(23.7)	(10.1)	2.0	
700	軒丸瓦	B	SX3004		谷・・・	凸面	(8.8)	(9.3)	9.4	稲追二束文瓦
701	丸瓦	B	SD2004		「谷川嘉兵衛」	凸面	(10.9)	(10.8)	1.9	釘穴空く
702	軒丸瓦	B	SD2004		「谷川嘉兵衛」	凸面	(15.4)	(12.6)	13.5	稲追二束文瓦
703	軒丸瓦	A	SD2004		谷川孫八	凸面	(14.4)	(14.3)	11.5	稲追二束文瓦
704	軒丸瓦	A	SD2003		谷川孫八（八は左に小さく刻む）	凸面	(15.2)	(14.2)	10.2	稲追二束文瓦
705	軒平瓦	B	第4包		谷川孫	外縁幅	(10.3)	(4.9)		稲追二束文瓦
706	軒丸瓦	B	SD2003		「谷川瓦屋嘉・・・」	凸面	(10.3)	(8.5)	5.6	稲追二束文
707	平瓦	B	第2包	T-2	「共ナ」共の字を十字が丸く取り囲む。ナあるいは九か	縁端面	(6.3)	(5.7)	1.9	
708	軒丸瓦	B	SD2004		「谷川瓦屋・・・」	凸面	(15.8)	(11.9)	7.9	珠文(8)
709	平瓦	B	SD2004		「谷川孫八」を□で囲む	凸面	(12.1)	(12.4)	1.8	八は左に小さく
710	平瓦	B	SD2003		「武右衛門」	凸面	(11.9)	(8.8)	1.7	
711	平瓦	B	SD2004		「・・・武右衛門」	凸面	(10.6)	(7.6)	1.6	
680 712	軒丸瓦	B	SD2004		「谷川瓦屋武右衛門」	凸面	(15.3)	(14.8)	9.5	稲追二束文
713	丸瓦	B	SD2001		「改祈？彦？」か	凸面	(11.4)	(11.1)	1.7	
714	丸瓦	B	攪乱	T-3	「商標登録泉州谷川瓦株式会社製造人辻清三郎」	凸面	(11.1)	(7.8)	1.7	
715	軒丸瓦	A	第2包		「・・・孫右衛門」	凸面	(15.8)	(15.3)	12.3	巴文 珠文(8)
716	飾瓦	B	SD2004		「武」	上面部端	(20.6)	(13.3)	2.0	水の装飾
717	軒丸瓦	A	SD2004		い（○で囲む）	凸面	(14.8)	(14.5)	7.6	稲追二束文瓦
718	軒平瓦	B	SD2004		い（○で囲む）	左外縁幅	(10.5)	(6.9)	8.5	
719	軒平瓦	B	SD2003		い（○で囲む）	右外縁幅	(13.2)	(7.3)	16.1	
720	軒平瓦	B	SD2004		い（○で囲む）	外縁幅	(11.8)	(7.1)	6.7	逆さに刻む
721	平瓦	B	SD2004		「か」を○で囲む	広端面	(30.4)	(13.1)	2.2	

表7 刻印瓦

掲載 番号	種類	調査区	遺構	出土 位置	刻印	刻印 位置	縦	横	長さ	備考
722	軒丸瓦	A	SD2003		㊦	凸面	(14.9)	(14.7)	9.8	稲追二束文瓦
723	丸瓦	B	SK2010	1/20 図㉗	「祈庄改」を□で囲む	凸面	(12.1)	(10.3)	1.8	
724	丸瓦	B	SX2011		「祈庄改」を□で囲む	凸面	(8.6)	(9.1)	1.7	
725	丸瓦	B	SK2010	1/20 図㉘	「祈庄改」を□で囲む	凸面	(6.8)	(8.7)	1.7	
726	丸瓦	B	攪乱	A-6	「・・庄改」を□で囲む	凸面	(6.6)	(5.6)	—	
727	軒平瓦	A	SX2016		「祈庄改」を□で囲む	外縁幅	23.9	12.9	10.5	
728	平瓦	B	第2包	T-20	「上ト」を□で囲む	縁端面	(5.5)	(7.2)	1.8	
729	丸瓦	B	SX2003		「池谷カイトリ」	凸面	(14.8)	(10.8)	1.7	
730	丸瓦	B	攪乱②	T-5	「池谷カイトリ」を□で囲む	凸面	(8.3)	(7.1)	1.6	
731	軒丸瓦	B	攪乱	T-3	「登録商標池谷本〇山内」	外縁部分	(14.3)	(14.2)		無紋
732	平瓦	B	攪乱		「山内」を□で囲む	縁端面	(6.8)	(2.9)	2.0	
733	軒平瓦	C	SX1003	1/20 図㉙	㊦	右外縁幅	—	—	—	—
734	軒丸瓦	B	第1包		「上」を印刻する	外縁幅	(13.8)	(11.5)		珠文(5)
735	丸瓦	B	SD2003		「三忠」を□で囲む	凸面	(5.6)	(6.3)	1.6	
736	平瓦	B	第1包		「忠」を□で囲む	縁端面	(14.4)	(12.1)	1.9	
737	平瓦	B	攪乱	B-5	「政次改」を□で囲む	縁端面	(14.2)	(8.2)	1.9	
738	軒丸瓦	B	第2包	T-4	「阿万忠改」を□で囲む	外縁幅	(5.8)	(3.8)		
739	軒棧瓦	B	SD2004		「三忠改仕入」を□で囲む	軒丸外縁幅	9.1	9.0	(3.5)	珠文 11
740	軒棧瓦	B	第1包		「与右工門改」を□で囲む	軒丸外縁幅	8.8	8.7	(15.8)	珠文 11
741	平瓦	B	攪乱 6		「・・・特・・・式分森」	凸面	(11.4)	(7.7)	1.8	

表 7-1 ヘラ書き瓦に見る瓦職人別供給先編年表

職人名 紀年銘	嘉左衛門	七兵衛	七 蔵	嘉兵衛	半左衛門	孫 八	武右衛門	民右衛門	伊兵衛	久左エ門
	永正12年(1515)	岩出町								
天和 2年(1682)		海南市								
貞享 3年(1686)		〃								
〃 5年(1688)			下津町							
宝永 4年(1707)				粉河町						
元文 5年(1740)					高石市					
寛延 4年(1751)	徳島市									
宝暦 3年(1753)					海南市					
〃 6年(1756)					和歌山市					
〃 11年(1761)	和歌山市									
明和 2年(1765)		下津町								
〃 3年(1766)		和歌山市				海南市				
〃 4年(1767)						〃	古座町			
〃 6年(1769)		下津町				下津町				
安永 3年(1774)								泉大津市		
〃 5年(1776)		岬町								
〃 6年(1777)		海南市								
〃 8年(1779)		〃								
〃 9年(1780)		〃								
天明 7年(1787)		和歌山市								
〃 8年(1788)							和歌山市			
寛政11年(1799)							桃山町			
享和 2年(1802)				和歌山市						
文化元年(1804)									岬町	
〃 9年(1812)						下津町				
〃 14年(1817)						有田市				
文政乙酉(1825)										岬町

表 7-3 ヘラ書き瓦に見る瓦職人の自称の変化

紀 年 銘	「瓦師」を称する資料	「瓦屋」を称する資料
天和 2年(1682)	七兵衛(浄国寺)	
貞享 5年(1688)	七蔵(善福院釈迦堂)	
宝永 4年(1707)	中山加兵衛(粉河寺大門)	
元文 5年(1740)	半左衛門(専称寺)	
寛延 4年(1751)	嘉左衛門(徳島城表御殿跡)	
宝暦 6年(1756)		半左衛門(善行寺本堂)
宝暦11年(1761)	嘉左衛門(総持寺総門)	加左衛門(総持寺総門)
明和 2年(1765)	辻七兵衛(地藏峰寺本堂)	
明和 4年(1767)	孫八(浄念寺鐘楼)	武右衛門(善照寺本堂)
安永 3年(1774)		民右衛門(阿弥陀寺山門)
天明 7年(1787)	七兵衛(本久寺本堂)	
寛政11年(1799)		武右衛門(蓮台寺本堂)
享和 2年(1802)		嘉兵衛(紀三井寺瀧本院本堂)
文化14年(1817)		孫八(善福寺本堂)



表7-2 紀年銘を有するへら書き瓦一覧表（谷川瓦窯発掘調査報告書 抜粋）

紀年銘	瓦職人銘	所在寺院	所在地
永正12年(1515)	谷川嘉左衛門	根来寺大伝法院多宝塔	和歌山県那賀郡岩出町
天和2年(1682)	瓦師七兵衛	浄国寺(保管)	〃 海南市
貞享3年(1686)	泉州谷川七兵衛	〃	〃 〃
〃 5年(1688)	泉州日根之郡谷川二代瓦師七藏	善福院釈迦堂	〃 海草郡下津町
宝永4年(1707)	泉州日根郡谷川庄小畑村瓦師中山加兵衛	粉河寺大門	〃 那賀郡粉河町
	泉谷川瓦師加兵衛		
	泉州谷川瓦師加兵衛		
元文2年(1737)	谷川	総持寺	〃 和歌山市
〃 5年(1740)	谷川村瓦師半左衛門	専称寺	大阪府高石市
寛延4年(1751)	谷川瓦師嘉左衛門	徳島城表御殿跡	徳島県徳島市
宝暦3年(1753)	泉州谷川半左衛門	禅定寺(保管)	和歌山県海南市
〃 6年(1756)	泉州日根郡谷川半左衛門	善行寺本堂	〃 和歌山市
	泉州谷川住瓦屋半左衛門		
〃 11年(1761)	泉州谷川住瓦屋加左衛門	総持寺総門	〃 〃
	泉州谷川住瓦師嘉左衛門		
明和2年(1765)	瓦師泉州日根郡谷川之住辻七兵衛	地藏峰寺本堂	〃 海草郡下津町
〃 3年(1766)	泉州谷川孫八	浄念寺本堂	〃 海南市
	谷川辻七兵衛	西應寺本堂	〃 和歌山市
〃 4年(1767)	泉州瓦師孫八	浄念寺鐘楼	〃 海南市
	泉州谷川瓦屋武右衛門	善照寺本堂	〃 東牟婁郡古座町
〃 6年(1769)	泉州谷川辻七兵衛	極楽寺本堂	〃 海草郡下津町
	泉州谷川孫八		
安永3年(1774)	泉州谷川瓦屋民右衛門	阿弥陀寺山門	大阪府泉大津市
〃 5年(1776)	七兵衛	西林寺本堂	〃 泉南郡岬町
	辻七兵衛	常見寺山門	〃 〃 〃
〃 6年(1777)	泉州谷川辻七兵衛	専称寺本堂	和歌山県海南市
〃 8年(1779)	泉州谷川辻七兵衛	専修寺本堂	〃 〃
〃 9年(1780)	泉州谷川辻七兵衛	専念寺本堂	〃 〃
天明7年(1787)	泉州谷川瓦師七兵衛	本久寺本堂	〃 和歌山市
〃 8年(1788)	泉州谷川武右衛門	紀三井寺開山堂	〃 〃
寛政元年(1789)	淡輪村□吉	西教寺本堂	大阪府泉南郡岬町
〃 11年(1799)	□谷川瓦屋武右衛門	蓮台寺本堂	和歌山県那賀郡桃山町
享和2年(1802)	泉州淡輪村瓦屋□兵衛	紀三井寺瀧本院本堂	〃 和歌山市
文化元年(1804)	谷川伊兵衛	西林寺山門	大阪府泉南郡岬町
〃 2年(1805)	泉州谷川	蓮花寺本堂	和歌山県海南市
〃 5年(1808)	谷川	地藏院	〃 有田市
〃 9年(1812)	泉州谷川孫八	教徳寺本堂	〃 海草郡下津町
〃 14年(1817)	泉州谷川瓦屋孫八	善福寺本堂	〃 有田市
文政乙酉(1825)	谷川久左エ門	西教寺山門	大阪府泉南郡岬町
明治15年(1882)	泉谷川辻三十郎製(刻印資料)	南宗寺仏殿	〃 堺市
昭和2年(1927)	泉州谷川西田庄五郎	西念寺(保管)	和歌山県海南市



## 写真図版



C区 第2遺構面調査状況（西から望む）





A区第1遺構面（西から）



B区第1遺構面（西から）



B区第1遺構面東部（北西から）

写真図版 1





A区 SD2003 (左)・SD2007 (中)・SD2004 (右)  
(北東から)



A区 SD2004 (左)・SD2007 (中)・SD2003 (右)  
(南から)



B区 SX2014 (東から)

写真図版 2





B区 SX2029 遺物出土状況 4 (南から)



B区第2遺構面 (西から)



A区第3遺構面 2 (南東から)

写真図版 3





A区 SX3027 (左)・SD3016 (右) (南から)



B区第3遺構面東部 (西から)



B区第3遺構面2 (西から)

写真図版 4



B区 SD3006・SD3010・SX3001 (西から)



A区 SJ4001 (南東から)



A区第4遺構面西部5



写真図版 5





A区第4遺構面東部（南から）



A区第4遺構面（西から）



B区SD4012（南から）

写真図版 6



B区 SX4029 (北西から)



B区第4遺構面 (西から)



B区第4遺構面南東部 (東から)



写真図版 7





C区第1遺構面礎石1（北東から）



C区第1面石列出土状況（北から）



C区第1遺構面（北東から）

写真図版 8





C区第2遺構面（北東から）



C区第3遺構面（東から）



C区第3遺構面石列状況（東から）

写真図版 9





C区第3遺構面（北から）



C区第4遺構面（西から）



C区第4遺構面（東から）

写真図版 10



## 報告書抄録

ふりがな	とくしまじょうかまちあと とくしまちょういっちょうめちてん				
書名	徳島城下町跡 徳島町1丁目地点				
副書名	徳島中央警察署新庁舎整備事業に伴う発掘調査報告書				
シリーズ名	徳島県埋蔵文化財センター調査報告書				
シリーズ番号	第96集				
編著者名	岡田 圭司		徳島県文化資源活用課		
編集機関	公益財団法人徳島県埋蔵文化財センター				
機関所在地	〒779-0108 徳島県板野郡板野町犬伏字平山86番2				
発行年月日	令和3(2021)年3月26日				
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経
		市町村	遺跡番号		
徳島城下町跡 徳島町1丁目地点	徳島県徳島市徳島町1丁目5	36201	201-76	34度 4分 16秒	134度 13分 26秒
調査期間	調査面積	調査原因			
発掘調査 20180701～20190331 整理作業 20191001～20200131 20200401～20210331	表面積 1,595㎡ (延べ面積 5,820㎡)	徳島中央警察署新庁舎整備事業			
遺跡種類	遺跡年代	主な遺構	主な遺物	特記事項	
城下町	近世	柱穴 溝 (屋敷境となる溝) 性格不明土坑 (池状遺構貯蔵庫) 柵列	陶器・磁器(肥前・瀬戸美濃・備前・堺明石・京)、土師器、瓦、木製品(木筒・漆製品)、金属製品(煙管・銭貨)、動物遺存体、貝類	「新御蔵」と「森甚太夫」家の屋敷境となる溝・柵列 大形池状遺構	





徳島県埋蔵文化財センター調査報告書 第96集

徳島城下町跡徳島町1丁目地点  
—徳島中央警察署新庁舎整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査—

発行日 令和3(2021)年3月26日

編集 公益財団法人 徳島県埋蔵文化財センター  
〒779-0108 徳島県板野郡板野町犬伏字平山86番2  
TEL (088) 672-4545

発行 徳島県  
公益財団法人 徳島県埋蔵文化財センター

印刷 グランド印刷株式会社

